

「小児科 プロセス & プラクティス」

東京大学医学部附属病院分院小児科講師 柳 川 幸 重 編著
 茨城県立こども病院小児科部長 土 田 昌 宏
 国立小児病院小児医療研究センター内分泌研究室室長 田 中 敏 章
 東京都・大田区雪谷保健所予防課主査 永 井 恵 著
 神奈川県立こども医療センター神経内科医長 三 宅 捷 太

国立小児病院院長
 小 林 登

5人の若手小児科医が、小児医療の現場で診療に直接役に立つ problem-oriented な本を自らの体験に基づいて作った。

小児医療の現場でよくみる問題 (problems) 59, 全身的なもの 14, 腹部に関するもの 7, 呼吸に関するもの 2, 心臓に関するもの 4, 腎に関するもの 3, 血液に関するもの 2, 内分泌に関するもの 9, 神経に関するもの 6, 新生児に関するもの 12, を取り上げ、診断に必要な基礎知識 (essential), 診断の考え方, やり方 (approach), 診察, 検査そして診断に当たっての注意点 (points), 治療に必要な基本的知識 (essential) と日本語化した英語で整理している。また、診断の手順のフローチャートまで示されている。更に小児保健に関する2項目を加えて

いる。

本書の基盤にある理念は、診断の情報理論のようにみえる。時間・物質・エネルギーのほかに情報があるという世界観の中で育った世代の作ったものとして、高く評価したい。

評者も東大で学生たちに bed-side で教えているときに、よりよい診断と治療は、問診による病歴とか視診・聴診・触診などによる診察、更に検査によって良い情報をたくさん集め、考えられる多くの疾患と治療法の中から、可能性の高いものを選択 (selection) と除外 (ruling-out) によって意志決定する思考のプロセスであることを述べた。その意味で、本書は学生に、外来のポリクリや、bed-side での実習に用いてもらいたいと思う。

研修や第一線の医療では、本書で

整理された考え方・やり方 (approach) で処理できない場合が少ないことを銘記して、本書を利用する必要があると思う。むしろ、本書からヒントを得て、自分の approach を作るべきものであろう。

編著者・執筆者は、あまり小児科学界で知られていない若手である。しかし評者は編著者の柳川君・土田君・田中君とは、機会あって知己を得ている。なかでも柳川君は評者が東大にいたときに入局し、アメリカに渡り、ニューヨークの第一線の小児医療の中で、専門医の資格をとり、チーフレジデントを務めた実力者である。その経験が、本書の1つの柱になっているように思われる。3人の編著者のほかに、三宅さん・永井さんが執筆に加わっている。この5人は、神奈川県立こども医療センター、虎の門病院、あるいはその両院で御縁のあった仲間であり、先輩・後輩である。わが国において、この2つの病院の医療は、その質が高いことは周知のとおりである。その体験が本書で十分に活かされている。

大学紛争後の世代の小児科医が、新しい小児医療の在り方を求めている情熱の感じられる好著である。ぜひ小児医療の現場で、利用されることをお勧めしたい。

B5判 468頁 8,700円 送料300円
 1987年 医学書院 刊